慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済史発展の現段階
Sub Title	
Author	渡邊, 國廣
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1956
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.49, No.10 (1956. 10) ,p.754(66)- 756(68)
JaLC DOI	10.14991/001.19561001-0066
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19561001-0066

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

經濟史發展の現段階

一

西ヨーロッパの經濟史學界の最近の動向については既に我が國で紹介記事がすこぶる多い。しかし立場の相違によつて記事にはそれぞれ特徴があり、學界の一側面のみが過大に重視されるという傾向は最初から免かれなかつた。例えばマルクス史家の活躍に重點を置き、西ヨーロッパの經濟史學界があたかもマルクス史家を中心に展開しているかの如き印象を抱かせる紹介記事があつた。他方このような動きに對しては一顧も與えない記事もあつて、これまでに公正な紹介が現われたとは思えない。歴史研究の方向を誤らせないためにも、西ヨーロッパの經濟史學界の動向について眞に公正な紹介を望むのは一人筆者のみでない。

問題となるのは、戰後において特に著しいマルクス史家の登場と、經濟學者の經濟史の領域への接近を如何に意味づけるかということであつた。一部でいわれる如く、西ヨーロッパの經濟史學界は果してマルクス史學一倒邊であつたであろうか。もし一倒邊でないとすれば、マルクス史學の擡頭を經濟史の發展のなかで如何に位置づけたらよいか。また經濟史家に對する經濟學者の指導が強まつたといわれるが、具體的な事情はどうか。西ヨーロッパの經濟史學界の動向については、この二つの問題に對する公正な解答が寄せられることによつてのみ公正が期せられるであろう。

ポスタン教授はこういつた問題についてタイムス紙一九五六年一月六日號の「文獻補遺」に興味深い見解を發表した。以下はその紹介である。西ヨーロッパの經濟史學の展開に對する教授の見解は我々にとつて參考となるに違いない。目に通し得る僅かな文獻だけで學界動向という困難な問題に取組まざるを得ない我々に對するそれは一つの警鐘でもあつた。

二

「經濟史の研究は今や盛んな仕事である」。「論文や著書の發表は、難解なものであれ、通俗のものであれ、量において非常に增している。」

「この隆盛は多くの原因による」。「原因の若干は明白に外的なものである」。そして教授はこう考えた。「經營史の分野で今日・・・多くの研究がなされつつある」が、「これは明白に、企業の問題という魅力のためばかりでなく、古くて大きな會社に對する媚からである」り、また「機械工業・軍事工業・造船業・配給機關の最近史」や、「國民所得と支出の最近史が詳細に研究されている」が、「この功績はあらゆる種類の官廳や團體の後援、また特に政府と國立社會經濟研究所に歸す」と。

「今日享受している外部からの恩惠のうちで」、「經濟史がその仲間たちから受取つた支持をも考えねばならない」。「地方の古物研究者は、一般に今日考えられる程經濟史に關係しないが、經濟史家のために原史料と未完成の材料を提供して來た」。また「經濟史の研究がマルクス主義者、そして特に若きマルクス主義者から受取つた支持があつた」。いずれもこれらは「懇請しない支持」、「勞せずして得た支持」であつた。教授は經濟史における地方史家ないしマルクス史家の位置をかかるものとして理解した。

しかし「外部からのこの惠與のみが經濟史の最近の隆盛を說明しないだろう」「主たる推進力は內部から來た」と教授はいう。「非常に最近まで公然なものとならないまでも、長い間に增大した教義上の困難」こそ推進力となつた。そして教授は經濟史の發展を簡單に回顧することによつてこのことを裏付けようとした。

「經濟史は學問的發展の立派な記錄を持ち」、「經濟史の研究者が內面的な理念の集積された困難によつて觸發されたのは今回が最初でない」。「經濟史は非常な政治的保護の下にこの世紀の轉換期に始まつた」。「その創始者で權威ある書物の著者の二人はアルカデアコン・カニンガムとウイリアム・アシュリー卿で、ドイツ歴史學派の傳統・・・のなかから現われた」。「ドイツの原型と同じく、主として國の經濟政策に興味を寄せ、新トーリー派の帝國主義者と保護主義者の・・・ための知的兵器庫たらんとした」。

「次の世代」は「アンウイン、ウェブ夫妻、コール及びトーニーの時代で、ドイツ的な型からもトーリーの示唆からも脫した」。しかし依然として「政治的關心は殘つた」。「なかでもトーニーは・・・未だに最も影響力のある人物で、・・・その著作は彼の世代の歴史的・政治的關心を反映するばかりでなく、現在において討論される歴史上の若干の問題をも暗示し」た。

しかし教授によれば、「經濟史家の現在の・・・世代は政治理念によつて直接に示唆されることがより少なく、・・・從つて・・・より・・・學問的で理論的である」。「經濟史家の或る者は・・・好んでみずからを經濟學者と看做し」、「經濟理論家が現實・・・との關連において論じたと同じ問題を過去との關連において論ずる」ようになつた。かくて「一九三〇年代の經濟史家が恐慌と景氣變動の歴史に寄せた關心は驚くに値しない」。「經濟史家の經濟學の理論的問題へのかかり合いは戰後の世界より更に古」かつたのである。

もつとも「經濟史家が經濟學の論爭の激しい呼吸にさらされるようになつたのは僅かに戰後である」と教授はいう。目立つた傾向として、「經濟學者が全體として經濟史の本來の領域に進出し」た。「繼承した技術―短期もしくは靜態の問題の抽象的分析の技術―の學問的・實際的可能性を使い果したため、また後進國の經濟的發展について政府に勸告するよう要求されたため、經濟學者は數世代、數世紀を通じての經濟發展の議論に段々に入つて」行つたのである。「大抵の經濟學者は短期から長期へ、商業恐慌から經濟發展の問題へ移ることによつて歴史の世界のなかに入ることを實現」した。「成長の問題に對する解答が隱されている場は經濟學者の本來の領域の全く外にあ」つたためであると教授は考えた。

「新しい關心によつて起された歴史的・社會學的研究は屢々經濟學者自身によつてなされ」るだろう。しかし「經濟學者は歴史家が・・・經濟發展の議論に・・・加わることを期待」した。教授によれば、「これは歴史家が拒否することの出來ない招待であり、また歴史家が承諾のあらゆる意志を示した招待である」。そして「或る歴史家はこの問題の歴史的性格を確認することによつてばかりでなく、その解決のための完全な靑寫眞を與えることによつて應答し

た」。また「他の歴史家は人口・資本蓄積・工業化・勞働移動・企業家の型・貯蓄の誘因及び經濟成長の他の構成要素の研究・・・に忙しく立ち働いた」。「中世史家は傾向の研究・・・へ向つた」。「研究の大部分が今日目差しているのはこういつた問題について」であつたと教授は結んでいる。

三

「經濟史の研究は今や全速で前進しつつある」。經濟史が到着した發展の現段階はポスタン教授によつて以上の如く概觀された。一部で過大評價されるマルクス史家の擡頭を教授は經濟史の目覺しい發展を外部から支えるものとするが、決して發展の本筋とは考えなかつた。むしろ經濟史の發展は內部的な力の發展により促進されたのであり、經濟學の理論的問題に對する經濟史家の接近、また經濟學者の經濟史の領域への進出こそ經濟史發展の現段階を特徴ずける重大な事項であつたとした。經濟史と經濟理論の交流のうちに教授は經濟史發展の現段階の大きな特徴を見出そうとしたのであつた。

從つてこの段階では經濟史と一般史との距離はいよいよ大となつて行く。歴史學の一分科としての經濟史ではなく、經濟史は經濟學の一分科であるという線がますます明白なものとなつて來た。もはや「經濟史家は問題を歴史上の通俗的な事件や人物から選ばないで、社會科學の假設から選ぶ」。例えば中世史家は「農業の總生產量と新しい土地の生產性との關係」・「物價の動きに對する地金の供給の影響と人口の動きの影響」・「工業發展において演ずる技術變化の役割」を、また近世史家は「人口の長期の動きに對する出生率と死亡率の・・・影響」・「產業革命の必要條件としての農民的土地保有者の消滅に關するマルクス史家の假設の正當性」・「資本の供給に對する利子率の影響」・「工業發展の種々な局面における企業家の行動」・「賃銀の・・・刺戟に對する勞働者の對應」といつた問題を選んだ。そして教授はこういつた動きのなかに經濟史と經濟理論の交流という經濟史發展の現段階の大きな特徴が窺い知れるとした。

（渡邊　國廣）

物價史の研究について

一

勘定簿に記載の價格と賃銀は今日に傳わる最古の客觀的な史料である。經濟史家はこの貴重な史料を無視しなかつた。多くの經濟史家が物價史に關心を寄せた。トゥーク、ダヴェネル、ロジャーズは生涯の最も生產的な時期を物價史の完成に當てた。また今世紀に入つて物價史家としてイギリスではヴィヴァリッチ、ドイツではエルザス、オランダではポストゥムス、オーストリヤではプルブラム、ポーランドではヴュヤク、アメリカではベザンソン、コールが特に著名であつた。今後とも經濟史家は物價史の研究に向うであろう。度重なる戰亂で破壞されたといえヨーロッパの各地に殘存する多くの未開の勘定簿は經濟史家の關心を惹くに違いない。それだけに物價史の利用により何が得られるかは考えねばならぬ重大な問題であつた。

從つてここではそういつた問題について考えて見た。物價史の效用といつた問題で、物價史研究の動向についてではない。後の問題に關しては別に觸れる機會もあるであろう。

二

物價史の研究では實際に支拂われた價格と賃銀のみが問題となる。しかし政治的・宗教的な壓迫の下で支拂われたことが明瞭な價格と賃銀の記述は除外される。

從つて物價史の利用により貨幣の購買力判定ということが可能となる。近世の初頭では貨幣の價値變動が激しい。貴金屬の產出の革命的增加でまた戰爭による信用膨脹で貨幣の購買力が極端な低下を示す場合が屢々であつた。他方貴金屬の產出の相對的減少でまた戰後の信用收縮で貨幣の購買力が上昇を示す場合も起つた。この事態は多くの論者の關心を呼んだ。そして例えば一七六四年にギアンリナルド・カルリは、メキシコ銀の流入の增大が價格に及ぼした影響を確定するため、最初の指數の一つを考案した（"Del valore e della proporzione de'mettalli monetati", Pietro Custodi, *Scrittori classici italiani di economia politica*, Parte moderna, XIII, 335—54）。またジェボンズは十九世紀中葉におけるカリフォルニヤ、オーストラリヤの金坑の發見によつて起つた價格の高騰を測定するため指數を案出した（"A Serious Fall in the Value of Gold Ascertained and Its Social Effects Set Forth", 1863, 15—47）。エッヂワースが指數の作成を思い立つた主要な動機は、一八七三年から一八九六年にわたる不況期の物價暴落であつた（"Measurement of Change in Value of Money" reprinted in Paper Relating to Political Economy 1925, I. 195 ff.）。この期の暴落は、アメリカとドイツにおける銀貨の廢止・急速な技術變化・人口增加・新領土の擴大によつて金の產出が物價を維持するには不十分な程になつたという事情に起因した。

しかし最上の指數によつても貨幣購買力の變化を完全に測定することは困難であつた。時代の發展と共に新しい生產物が紹介され、舊い生產物に取つて代つた。近世に入つては特に激しく、そしてこのことがまた、長期にわたつて妥當する指數の作成を困難にしていた。從つて或る指數が貨幣の購買力の變化の程度を正確に示し得るためには、その作成に當つて精々五十年という短期間を對象とすべきこと、また需要の型や生產條件を異にする多くの基本的な生產物の價格、消費者により直接に使用される勞働の賃銀を基礎とすべきことが注意されなければならないであろう。

しかし價格と賃銀についての指數なしには貨幣の購買力に起つた大體の變化すら把握することが出來ない。指數に通じないスミスは見たままの事實から、價格の下落で勞働階級の地位が向上したと考えた（"An Inquiry into the Nature and the Causes of Wealth of Nations", Cannon ed.I, 192—200）。しかし『國富論』が書かれた當時において價格の上昇は激しく、十六・七世紀の價格革命の時期に劣らない程であつた。

一七九七年から一八二一年にわたる正貨支拂の停止期に起つた英蘭銀行をめぐる論爭では貨幣の購買力を測定しておくことがリカー